



足利・九条の会

「足利・九条の会」公式サイト
<http://www.ekip.net/9jo/>



2025. 6.10 41号
代表：采澤 tel:21-5797
担当：岩田 tel:43-0144

4月に30°の気候、雨が降れば土砂降りとなり、朝に寒くても日中は熱中症が心配になる。大変な気象環境の中で暮らしている会員の皆さん、お元気でしょうか。どうぞ、くれぐれもお身体を大切に、健康でお過ごしください。

思えば数年前までは、地球の気候変動、温暖化現象が大きく取り沙汰されていました。しかし、今やトランプ大統領の再登場で、そんなことはお構いなしに「利益主義」が横行しています。「オゾンホール」の言葉を全く目や耳にしない（=ホールではなくなっている）、海水温は上がり、氷河が崩壊するような異常な事態なのに、私たち地球人は、まだ戦争を続けているのです。戦争によって、多くの命（人間以外の命も）が自分の意思と関係なく失われ、生活が破壊され、環境が破壊され、気候変動に拍車がかけられています。全く愚かなことです。

私たちは、「お金儲けに走る人たち」からすれば、いつでも騙せる「愚かな民衆」かもしれません、「戦争などしない世界」「平和な暮らし」を求めています。地球の環境をできる限り守り、自然の恵みの中で命を全うしたいのです。生物の生きる目的である「子孫の平安と継続」を強く願っているのです。

今回、私たちが講演をお願いした前川喜平さんも、同じ気持ちであると、お話を聴いて強く思いました。学生時代に哲学を学び、中村元氏を始めとする仏教学者の本をたくさん読んだそうです。当然、「すべての命の大切さ」を深く考えたことでしょう。だからこそ、「文部事務次官」という地位に就いても、すべての命、すべての人々の暮らしという視点を失わず、仕事を続けられたのだと思います。

講演会は、その喜平さんのお話を心を一つにして聴けた、素晴らしい時間でした。私たちは、平和のために今できることを少しずつ、アイデアを出し合い、あきらめずに行うことを行いましょう。同じ思いでいる人たちと手を繋ぎ、力強く生きて行きましょう。 金子武司

今の状況がとてもよくわかる講演でした。

話を聞きながら母の事を思い出していた。



母は7歳の時に大阪空襲の中を逃げ回った。縁故疎開、家や父を失った嫌な記憶。戦後、教科書に墨を塗った事など、断片的だったが話していた。そして、憲法九条があるからこれからは戦争は無いよね、あんな思いはしなくてもよくなるよねと話していた。

しかし、今、戦争ができる国づくりが進められ、教育が変えられ戦前に逆戻りされようとしている。反省の上に出来た9条を守らないと。戦争が終わり、母がホッとした時が永く続いていく様にしないと！ と講演を聞いて思いました。 小林美幸

前川喜平氏は「憲法を守る」という立場を明確に打ち出していて、今はまるで戦前のようなと言う。

政府はまさに台湾有事があるかのように私たちを洗脳し、危機に備えるため、アメリカから戦闘機29機を調達し、23年には中国や北朝鮮の奥深くまで届く長射程対地攻撃ミサイル400発を取得したとしている。

中国×台湾の間で何かあったとしても、それは内戦であり日本の出る幕ではないのだ。しかしアメリカが絡んだらどうだろうか…

日本の米軍基地から出撃すれば巻き込まれることは必然である。しかも最前線になってしまう

前川氏はアメリカに「中国と闘うべきではない、どうしても戦うなら日本の基地を使わないでくれ」と言わなくてはいけないという。至極真っ当な意見だと思った。

今、我が国はあらゆる点で戦争できる国づくりを目指しているようだ。私たちは政府の動きをよく見て平和憲法を守り戦争のない日本を、そして世界の動きを注視していかなくてはならない。

山口美枝子

◎ 憲法ネット103 2025年憲法記念日メッセージより



日本国憲法は、平和主義を柱としています。この平和主義は、戦争をすることを禁じるだけでなく、戦争の準備をすることも禁じています。だから9条2項は、戦力を保持しないとしているのです。

大軍拡が進行し、25年度の軍事予算は8兆円を突破しました。これはまさに戦争の準備です。それは、私たちに「恐怖と欠乏」（憲法前文）をもたらしています。

限りある資源は、兵器の購入ではなく、「立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする人権保障につかわるべきです。 永山茂樹（東海大学）

地方のカトリック女子短大に勤務した日々に力を入れていたのは、自立した女性の育成でした。建学の精神が「社会を変革する女性の育成」であることに共感し、共通教育を通して様々な実践をしました。憲法や法学の授業では、人権について深めました。死刑制度に関するシンポジウムでは、積極的な意見交換がなされ、取材に来ていたテレビ局が、ニュースで8分間もその様子を伝えました。知る、考える、伝える、学生たちの成長は想像以上でした。

学生たちの共感力を実感する経験は、「国際平和論」の沖縄研修に顕著でした。平和ガイドによる連日のハードな見学と講話は、安穏な日常に疑問を持たずに成長してきた学生たちの目を開かせました。毎年、「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」共同代表である高里鈴代さんに講話をお願いしていましたが、日中の見学で疲れているはずの学生たちは、誰ひとり居眠りもせず、質問も多く、沖縄の女性たちの不安や苦悩に涙を浮かべていました。まだ辺野古の海岸に「命を守る団結小屋」があった頃、そこに常駐する「おじい」が、学生たちの訪問を喜び、「みんなのような若者が、この海を守りたいと言ってくれて嬉しい」と感謝の気持ちを伝えてくれたとき、自分にも存在する価値があるのだと泣いた学生がいました。沖縄の困難を、他人事ではなく、自分が向き合う課題だと認識し、平和や環境を守ることを生きる目標にしたのです。

今は母となった卒業生も多数います。時を経ても、何も変わらない沖縄の困難を報道で知った彼女たちのなかには、フラワーデモやフェミブリッジに協力を惜しまない者もいて、そこに確かに「平和の種」が芽を出していることを実感します。

戦争は暴力と欠乏そのものです。軍隊という暴力装置が沖縄の性暴力を生むのです。基地が偏在する沖縄が私たちに伝えてきた教訓を忘れてはならないと、改めて思います。平和憲法の掲げる理想を貫き通し、あらゆる暴力から命と尊厳を守っていくために、平和の種を蒔き続けます。 二瓶由美子（元桜の聖母短期大学教授）